一、次の文章を読んで、後の問いに答えよ。（字数制限がある場合は、句読点や記号等も字数に含む。）

父が亡くなった数日後だったと思う。悲しみに（ア）ヒタっているはずが、（イ）ミョウな感情に心がざわついた。力強いその感情に当惑し、注意してみると、それは怒りだった。父に対する怒りだった。簡単に言えば、「なんだ、死んじゃったりなんかして、ふつうの人にすぎなかったんじゃん」、存在していたものが存在しなくなるという（ウ）アットウ的な経験に慣れはじめると同時に、いつのまにかそんな非難を心のなかで父に向けていた。

わたしにとってかけがえのない人であった父は、死ぬことによって、父もまた一人の人にすぎなかったということを教えてくれた。

自分もまた一人の人にすぎないということ、地球上に何億といる人の一人、これまで地球上を過ぎていった何千億、これから過ぎていく何千億の人の中の一人にすぎないということを実感することほど、人間にとって難しいことはない。それほどA近さの原理が人間の感性と知性を支配している。近ければ近いほど、そのものは特別で、絶対的で、大切だ。そして自分に最も近いものは自分だ。

新型コロナウイルスは自分もまた一人の人にすぎないという原則をつきつけてくる。もちろんそこに人間社会に固有なさまざまな付帯条項があっというまに付随してきて、たとえば手を始終洗ったりすることのできない野宿をする人や、レジでたくさんの人と接触をしなくてはならないレジ打ちの仕事をしている人と、大学教授で普段とそれほど変わらない生活を隔離状態でつづけながら、オンライン授業をどうすればいいのだろうとぼんやりと考えている人では、Bウイルスを前にして同じ一人の人にすぎないと言い切れない事態が派生してくる。

それでも原理原則として、世界中でどの人もいま、自分はほかの人と同じように新型コロナウイルスにかかって死ぬ可能性があるということを認識し、ウイルスを前にして、自分もまた単なる一人の人にすぎないということを理解しているだろう。我が国の首相や、一部の極端に想像力の欠けている国家元首を除いた人類の大半が、いま、死の恐怖を前にして、結びついている。もし自分も他の人と同じようにウイルスにかかるかもしれないという意識で人類に結びつくことができていない人がいるとしたら、自分の近さの（エ）ノロいから早急に解かれるよう想像力を（オ）キタえるべきである。

C今回のこの悲劇は、人類という共同体の輪郭をはっきりと浮かび上がらせた。それは共同体性が、頭で理解できるようになったというだけではない、それが、現実として体験できる、そういう経験としてまず今回の危機をしっかりと捉えたい。

ピエール・パシェ*というフランスの作家をわたしはずっと研究しているが、彼のもっとも稀有な特徴は、個人というものの重みを損なうことなく、個人個人がみな同じたんなる一人の人にすぎない、le premier venu（どこにでもいる人）[1]にすぎないということをつねに念頭に置こうとしつづけた点だ。彼の作品は、Dこの徹底した民主主義を語り続けている。

彼がこよなく愛した哲学者シモーヌ・ヴェイユ**によれば、人間は神のイマゴとして自分を「世界の中心に位置していると想像している」。けれども人間は神ではないのでこの想像は幻覚にすぎない。だから「この想像上の中心の位置」を諦めよとヴェイユは説く。それも「頭だけで諦めるのではなく、魂の創造的な部分で」、そうすれば「現実に目覚めることができる」というのだ。「想像の中で世界の中心であることを諦めること、そして世界のすべての点を中心として見極めること」[2]、この不可能な精神訓練をパンデミックは束の間、可能にしてくれているのではないか。もっとも自分に近い自分を、遠くのものとして据え置くこと。近さの原理を攪乱する力をパンデミックはもっている。その意味で革新的な危機なのではないか。

数字の脅威と毎日直面するのが、まずそのいい訓練になる。日々増えていく感染者数、死者数、そこから割り出される死亡率。年齢別の重篤になる率、さらにその死亡率。多くの人間が、自分はそれほどの死亡率ではないと胸をなでおろす。しかし近さのもたらす幻覚から目を覚ませば、その二％のなかに自分は入らないとは誰にも言えないのだ。特別な存在として感じられるこの自分もまた数字に含まれる誰かにすぎない。しかしそれだけでは足りない。ヴェイユの言うように、自分の中心性を麻痺させるだけではなく、世界のすべての点を中心として見渡すことが必要なのだ。遠くの人も、自分と同じようにかけがえのない存在であるということを感得することは容易ではない。そこにはヴェイユの言うように「魂の想像力」が必要なのだろう。

新型コロナウイルスが私たちに見せつけてきたのは、この人間の遠近に対する限界でもある。危険が間近に迫ってきてはじめて人間は危険を自分のものとして、現実としてとらえることができる。いくらウイルスは人間を差別しないとわかっていても、アウトブレイクが中国やイタリアという遠い国で起こっている限り、人の想像力は麻痺し、自分も死ぬ確率はあるけれども、それはまだ数字にすぎず、私という人の問題ではないと思ってしまう。

各国の対応はその点できわめて興味深かった。自分の本当に足元まで危機が迫らないと反応できない国が、あまりにも多かった。台湾や韓国、シンガポールの例は、政治的想像力を駆使した見事な例だった。しかし、日本のように近くにいながらいかなる想像力も発揮しなかった国もあるとはいえ、これらの国はやはり距離的に中国に近い国々だ。それに対して欧米諸国はどうかといえば、そうした国々にとって中国はどうしても地球の裏側なのだ。欧米のメディアでも、その後このことは自覚的に反省された。

ここにはジオポリティクスの長い歴史の影響も見られる。東洋では、一九世紀なかば以降、欧米の方を常に向くという姿勢がずっと身についている。自己植民地化した日本という国では、中国の状況よりも、イギリスやフランスの状況のほうが身近に感じられることも多いのではないか。一方、西欧諸国にとって、中国は大国であり、もはや切っても切れない経済的パートナーであるにも関わらず、そこで発症した新型コロナウイルス感染が、自分たちの生を脅かしにくるのだと、「魂で」想像することはできなかった。アジアはヨーロッパにとって依然、遠い存在である。実際、西欧諸国が、韓国や台湾の対応の仕方に注目しだしたのは、イタリアでの隔離が本格化しようとした三月一〇日以降ではなかっただろうか。

マスクの例もまた如実に、ジオポリティクスの歴史を物語っている。今日四月八日、ようやくフランスもマスクの使用を義務付ける決断をしたようだ。それまで長い間マスク装着の有効性が疑われていた。いまでもたしかに、FFP2ではない普通のマスクで感染を防ぐことは難しいとされている。しかし、感染者の飛沫が散らないという点で、皆がマスクを装着す

ることの有効性が認められたようだ。マスクの使用は、個人というものの尊厳と尊重を最優先させ、公共という概念のもとに個人が集う開かれた社会を目指す西欧において、異様なものと見做され、これまで受け入れられてこなかった。そのマスクがアジアで有効に使われているのを見て、はじめてフランス人も、大きな心理的ハードルを克服しながら装着しはじめたようだ。

ヨーロッパがアジアを範としたのはこれが初めてかもしれない。そしてこの数日で、台湾と韓国の対応を見習うべきであるという趣旨の記事がアメリカでもヨーロッパでも増えているし、政策も確実にその方向に進んでいる。

遠いアジアではじまった感染を自分たちの問題として捉えることのなかなかできなかったヨーロッパであるが、隣国でもまだ遠すぎたようだ。人間のこの遠近感の限界はそれほど近視眼的なものであることが、今回ほど痛切に感じられたことはない。イタリアが隔離政策をとりはじめたのは三月八日だったが、その前後から隣国フランスへの忠告が各種メディア[3]で、そしてSNS上で盛んに送られた。しかしフランスが隔離を決定するまで一週間以上かかった。隣国で起こっていることは、まだ遠いのだ。

ここでもう一つ注目に値するのは、国という、現代の世界を構成する動かしがたい制度だろう。今回、人々は、国という制度なしに新型コロナウイルスと迅速かつ効率的に対決することが不可能であるということを、否が応でも感じずにいられなかったのではないだろうか。人々を組織し、統括し、監視すると同時に、そこにいる人々を良かれ悪しかれ守る制度、単位。

国はたしかに国の中にいるものの距離を縮め、国の外にいるものとの距離を広げ、遠近感を歪ませる。しかし無能なだけではなく、腐敗し、データを改竄する政府を戴き、国が国として機能しない日本で暮らしている私たちこそ、制度としての国の必要性をいま痛感していないだろうか。先にアウトブレイクを経験している国の情報をいち早く集め、それをもとに医療システムを急遽、事態に対処できるように指示を出し、マスクや医療機器が不足しないよう生産システムを確保し、隔離でなければ自粛でもいいが、その経済的弊害によって生活が困窮する人々に当面の便宜を図るもの、それが国ではないだろうか。その国が立ち行かないから、いま日本人はそれぞれが適当に情報を集め、適当に対処するしかないのだ。この場合、この国の国民がもとからマスクと手洗いと自粛と他人恐怖症的な習性をもっていたことは、幸せなことだったのかどうか、いまとなってはわからない。そのおかげで、E何の政策もない状態で、かなり長い間ひどい感染率にならずに済んできたことは、今後の経過次第で、人命という点でも民主主義という点でも、必ずしもめでたいことではなくなる可能性が大きい。

根本美作子「近さと遠さと新型コロナウィルス」B面の岩波新書　（なお、本文は一部省略している）

原註

[1] Pierre Pachet, Le premier venu, essai sur la politique baudelairienne（『どこにでもいる人――ボードレールの政治に関する試論』）, Denoël, « Les Lettres nouvelles », 1976 ; rééd. revue et augmentée, Le premier venu, Baudelaire : solitude et complot, Denoël, 2009 (2009年再刊)

[2] Simone Weil, « Amour de l' ordre du monde », in Formes de l' amour implicite de Dieu, Œuvres, Quarto, p. 731-732.

[3] 文学の領域でいえば、イタリアの映画監督にして作家のCristina Comencini の「フランスのいとこたちへ」と題された「手紙」がリベラシオン紙に掲載されたのが三月一二日、Francesca Melandri のテキストは三月一八日、そしてル・モンド紙にPaolo Giordano のエッセーが登場するのが二四日である。

* ピエール・パシェ　フランスの哲学者（一九三七～二〇一六）
** シモーヌ・ヴェイユ　フランスの哲学者（一九〇九～一九四三）

問一、傍線部（ア）から（オ）を漢字に直しなさい。

問二、傍線部A「近さの原理」とは、どういうことか。本文中の内容を踏まえ説明しなさい。

問三、傍線部B「ウイルスを前にして同じ一人の人にすぎないと言い切れない事態が派生してくる」とは、どういうことか。本文中の内容を踏まえ説明しなさい。

問四、傍線部C「今回のこの悲劇は、人類という共同体の輪郭をはっきりと浮かび上がらせた」とは、どういうことか。本文中の内容を踏まえ説明しなさい。

問五、傍線部D「この徹底した民主主義」を意味する箇所を本文中より抜き出しなさい。ただし、四〇字以内とする。

問六、傍線部E「何の政策もない状態で、かなり長い間ひどい感染率にならずに済んできた」のは、なぜだろうか。医療看護の観点から、その理由を本文中の内容を踏まえ、さらにあなた自身で考えたことを論述しなさい。

問題は次の頁に続きます。

二、次の文章を読んで、後の問いに答えよ。（字数制限がある場合は、句読点や記号等も字数に含む。）

著作権者の許諾を得ていないため、
掲載しておりません。

問一、傍線部(ア)から(コ)を漢字に直しなさい。

問二、（　　A　　）に当てはまる文章を、本文中の内容を踏まえ、作文しなさい。ただし、三文で作文すること。一文の文字数は特に指定しない。

問題は、全部で三頁です。問題は、これで終了です。

〈了〉

令和三年度　富士市立看護専門学校入試　国語　解答用紙

受験番号

氏名

一

問一

ア

イ

ウ

エ

オ

問二

問三

問四

問五

20

40

二

問一

ア	カ
イ	キ
ウ	ク
エ	ケ
オ	コ

問二

第一文	第二文	第三文

問六